

## イノチえがく具象画 タマシイえぐる抽象画

田島征三

1990年代、第二処分場建設予定地の中心部を買い取り、闘っていた時、森の中で面白い形の木の実を何種類かひろって、その場で制作しはじめた。支援に来てくれていた人たちが「征三さん、それどこにありました？」と尋ねる。「ほら！あなたがふんずけてるのだよ。」ぼくは近眼乱視なのに、みんなが気にもとめないものを見つける。ぼくは、人と違う目をしていると、50年以上生きてきて、その時はじめて気付いた。この貧弱なぼくの肉体に、とてつもない能力を隠し持っているんだ。それなら堂々誰もやれなかった事をやってやるぞ。

1970年代、ぼくは西多摩郡日の出村（当時）に移住し、山羊や鶏を飼い、畑を耕しながら絵本や版画や絵画やエッセイを創作し、自給自足をめざす生活をしていた。その時、命と向かい合う生活を具象画により表現していた。その頃の作品は実にいとおしく、ぼくの代表作の一部になっている。1980年代には、すでに抽象という表現を手に入れていた。

1990年代、前述の木の実に始まり、伊豆に引越すと流木も材料になり、立体の空間へ。2009年「絵本と木の実の美術館」は、廃校そのものを作品にした。空間がぼくのアート世界になってから具象⇄抽象を行き来する。そして2021年、鉄の巨大オブジェの制作が始まった。この細部には具象を思わせる個所もあるが、抽象を目指している。環境問題や社会的なテーマのようにベクトルの強い作品は、抽象では困難を極めると考えていたが、乗り越えてみようと思い始めた。抽象の世界に具体的な発言を持ち込み、力づくで捻り込む事に快感すらもよおすのだ。



鉄のオブジェ「田に咲く花」制作協力：鞍掛純一

抽象形体には暴力性が滲み出てくる。その力を発言の武器として考えられないか。もちろん具体的な内容は表現できないが、方向性を暗示できるように思う。優しさと、あったか味を備えた力強い型躰。

この夏「九条美術の会」の展覧会が開催される東京都美術館の講堂で「心に響く表現とは」と題して講演する。ぼくは抽象画で憲法第九条を守るというコンセプトが表現し得るか？という問いを發し自ら答えようとしている。美術館講堂で、ことばの表現は出来るかもしれない。でもその美術館の展示室には、これからぼくが描こうとしている抽象による九条を守るというテーマの絵が飾られることになっている。もう逃げることは出来ない。

**第10回九条美術展** 東京都美術館 2021.8.5(木)~12(木)9:30~17:30

**美術講演会** 東京都美術館・講堂(入場料 500円)

**2021.8.10** (火)13:30~16:30(会場 13:00)

講師：田島征三「心に響く表現とは」

ダニー・ネフタイ「人権そして平和について」